

建築特集 病院建築

2017年9月号
No. 1270

倉方俊輔

「悪」のコルビュジェ
第9回 孤立するモダン

ロンシャン礼拝堂は、1955年に献堂された時から突出していた。一見して、既存のルールから外れていた。キリスト教の礼拝堂には見えなかった上に、それまでのル・コルビュジェの作品にも、一般化できる要素とできない要素とが混じり合っていたが、これほどまでに、来たるべき世界の普通を作品から抽出しようという思いを裏切るものはない。では、これは何であるのか。未来でないとしたら、彼はどの過去に戻ったのか。表現主義？ 古典主義？ あるいは実はモダニズムを内包しているのだろうか？ ロンシャン礼拝堂が、それまでコルビュジェに共感していた同時代の建築家や批評家たちを戸惑いの渦に巻き込んだとはよく言われる形容だが、今見ても、やはりそうだっただろうと思う。

完成から60年以上経った今でも突出し、孤立した存在であることには変わりない。結局、このような作品が世界の現代建築の潮流となることは、一形態などほんの一部の類似を除いてはなかった。では、逆に過去の建築の潮流に帰属させられたかという、それも無理だった。

もちろん、バルテノン神殿から地中海沿岸のヴァナキュラー建築、中世の修道院や船舶まで、さまざまなモチーフが意識と無意識の狭間を横切って流れ込んでいることは、研究者たちの努力によって明らかにされている。アーカイブに保管されている図面の描線1本が、仔細な寸法が、樋やドアノブといった細部が、標本を解剖するかのように検討された結果だ。研究がぜんぜん生真面目で部分的に見えても、根本にはこれは何であるのかという衝撃が存在しているだろう。この一つの建築は人を突き動かし、豊穣に生産してきた。

そして、何であるかを一言で言い表すことは、ますます困難になった。多種多様な要素がここで一つに集まっているという特異点としての性格はいっそう強まった。——[p.2-3に全文掲載]



光嶋裕介「コルビュジェのある幻想都市風景《ロンシャン礼拝堂》

～Urban Landscape Fantasia with Le Corbusier《Chapelle Notre-Dame du Haut de Ronchamp》】